

〇こまちなみシリーズ⑩

江戸時代の面影残す旧山陽道「神辺宿」

神辺と聞くと、かつてバレーボールの強豪校だった神辺旭高校を思い浮かべる程度の知識しかない私は、新幹線経由福塩線でJR神辺駅に降り立った。福山から三つ目、およそ15分。ご多分に漏れず人通りの少ない駅前。色褪せた観光案内板で確認して、神辺本陣跡、菅茶山の廉塾を目指して歩き出す。

路は普通車がやっとすれ違えることができる程度。なまこ壁に格子戸の家が目に入って来る。江戸期には商家だったようだが、恐らく今は普通の民家だろう。こうした江戸期の建物が残る一帯の道路は屈曲させるカギ型、丁字路で行き止まり状になっているところもある。

高屋川沿いの旧道。十日市、三日市、七日市と呼ばれるこの通りに入るとさらに漆喰や白壁造りの家が軒を連ねる昔ながらの風景。しばらく歩くと黒塗りの土壁に囲まれた屋敷が目に入る。門は閉められたまま、案内板をみると、ここが広島県重要文化財・史跡「神辺本陣」だ。日曜、祝日はボランティアガイドが案内してくれるが、あいにく平日だったため中々きない。ガイドブックによると本陣施設は延享3年(1746年)の建築。大名が宿泊する際は本陣役の居宅も含めその部屋数27、畳枚数200余枚。50人から70人が泊まることのできたという。現在、本陣役の住居部と本陣役が営んでいた酒造関係施設は消滅しているが、本陣関係施設はほとんど残っている。正面から入ると御成りの間、二の間と続き、札の間には休泊した大名の名前を記した「関札」が多数掛けられているという。これはやはり日を改めて、公開される日に行き、中を見学しなくては…。



周辺地図



神辺本陣跡



廉塾の表門

本陣跡からさらに北向きに歩くと廉塾がある。今から30年くらい前、東京勤務時代に電通の友人から「菅茶山の廉塾を是非訪ねてみたい」と言われ「それなに?」と問い返し自らの不明を恥じた苦い思い出がある。菅茶山(1748年~1827年)は京都で朱子学を学び、この地に塾を開いた。彼は当代一の漢詩人であり、困窮時に備えて米麦を蓄えておく朱子社会法を実践した社会実業家でもあった。当時この廉塾には全国から著名な文人墨客が訪れ、江戸後期、神辺に教育・文化の花が開いた。廉塾は表門は開いており中に入ることができる。講堂、寮舎、居宅は現存している。当時塾生が硯や筆を洗った水路、養魚池、菜園も残っており、菜園には今も畝を作り夏野菜が植わっていた。



ここから駅方向に引き返す途中、小さな蔵だが知る人ぞ知る銘酒「天寶一」がある。1910年(明治43年)創業、辛口のキレの良い酒で和食を活かす名脇役としての酒造りを心掛けているという。純米吟醸を一本求め駅へと向かった。

駅に着くと丁度福山平成大学のマイクロバスも到着。若者たちの他愛無い話、笑い声を耳にしながら、神辺を後にした。

(編集委員 三宅恭次)



〇こまちなみシリーズ⑫

銀山街道・上下宿

前々回訪ねた府中・出口通り、市街地を背に緩やかな坂道を上り詰めたところの三室橋、そこから急峻な山道に入る。坂根峠越えである。ここから上下宿までの銀山街道はおよそ20キロ余り。今は県道府中上下線に取って替わられているが…。

銀山街道(石州街道)は16世紀、銀を産出していた石見の国、大森から赤名峠を越えて三次、吉舎、甲奴、ここから二つに分かれて尾道に至る道と上下、府中、神辺、笠岡へのルートがあった。この間、約130キロ、当時は3泊4日の行程で牛馬300頭、人足400人が往還したという。



案内図

さて、上下宿。江戸時代には幕府派遣の代官のいる天領であった。明治以降も金融業を中心に豪商が軒を連ね、賑わいを見せていた。しかし、今はその面影はない。

JR上下駅から50mほどのところ、突き当りを右に行くとメインストリート、白壁となまこ壁が続く街並みがおよそ500m。右手に見える尖塔のある建物がこの街のシンボル、上下キリスト教会。旧財閥、角倉家の土蔵で、広島県文化百選にも選ばれている。しかし、現在改修中で覆いが掛かっており全容を見ることができない。その向かいが上下歴史文化資料館、旧岡田邸である。ここの長女、美知代が自然主義文学の代表的作家、田山花袋の「蒲団」のモデルである。この小説は日本における私小説の出発点になったと言われている。建物は持ち主が度々代わった為、創建当時を偲ばせるものは軒先や室内の梁、柱などごく一部であるが、和室の一部を再現、のちに女流文学者となる美知代の著作物などを見ることができる。

ここを出てさらに歩くと左手に見張り櫓が目に入る。明治初期の警察署、花袋が「備後の山中」でその印象を記している。ここが十字路になっており北方向を見ると正面に木造の大きな建物が見える。大正期に建てられた中国地方唯一の木造芝居小屋「翁座」、翁橋を渡り緩やかな坂道を歩いて5分ほど。中が見学できるかと思いきや大きな錠が掛けられている。戦後映画全盛期には大いににぎわったとか、しかし昭和35年に閉館、その後工場などとして使われたが、萩本欽ちゃんなどのテレビ取材をきっかけに修復・修理が行われ「芝居小屋」として復元している、という。パンフレットによると回り舞台、花道、2階の棧敷席、特に手摺は京都南座を模したと云われる見事な細工が施されている。現在はイベントなどで公開されるだけとは勿体ないことだ。

金毘羅さんの金丸座は四国に春を告げる風物詩としてすっかり定着している「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が行われ、全国からファンがやって来る。愛媛の内子座は8月の文楽の公演、これには数年前に行ったことがあるが、町を挙げての支援体制が敷かれている。いずれの小屋も翁座と同じように芝居小屋としての存続の危機に遭いながら、見事に復活しているのである。要は復元したハード(翁座)を活かすソフトを創り出すアイデアとこの翁座が町に人を呼び込む重要なツールであるとの認識を共有できるかどうかであろう。この芝居小屋の前に立ち、「残念」な気持ちで一杯になった。

踵を返し駅に向かう途中、一軒だけ戸を開け放している建物があった。中に入ると青年が一人出てきた。藤原幸大さん、地域おこしに取り組んでいるNPOの理事長さん。彼は旧府中市から上下町に通い、国の助成などを受けながらこの建



物（瀬川商店）の修復に取り組んでいるという。藤原さんによると「町中の旧家は間口は狭いが奥が深い。この建物も間口15m、奥行きは60mもあり、県道まで続いている。これだけでも一見の価値がある」と。藤原さんは福山大学の学生などボランティアを募り、イベントを仕掛けているようだが、まだまだ緒に付いたばかりの印象を受けた。

よく町の活性化を進めるには「よそ者、若者、馬鹿者」と云われるが、そこに住む人が彼らを遠巻きにしているだけでは真の活性化は出来ないだろうとの思いを、人気のない街を歩きながら強くした。

(編集委員 三宅恭次)



第26号 (平成28年11月15日)

〇こまちなみシリーズ⑬

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

うだつの上がる町 吉舎・七日市通

三次駅に着き、吉舎方面の福塩線の乗り継ぎを見ると後3時間！「これは待てない」とタクシーに乗る。話好きの運転手、馬洗川沿いを走るの「落ち鮎漁は終わりましたか」「わしもやるんじやが、これからでしょう」「三人で、兩岸に網を張って、追い込んで投網を打つんよ」「どのくらい獲れるん？」「多い時で300」「はあ？」「300匹よ、大きいのでシャクはあるのが入る」「シャク？」「一尺、30センチ。メスだと1500円で売れるよの」そんな会話をしているうちに三次市吉舎の旧市街地七日市通に着いた。

起点になるのが馬洗川に架かる巴橋北詰の「田中写真館」、昭和初期に建てられた吉舎のシンボリック建物。当時、洋館は珍しく近郷から弁当持参で見物に来たとか…。国の文化財建造物に指定されている。

人通りはなく、店らしい店もない。運転手さんが「あそこは食べる所も喫茶店もないよ」と云っていた。家々に三連の暖簾が掛かっている。〇△屋といった屋号のついたものが…。この暖簾は新市にあるデニム製造会社の工場が吉舎にあるため、そのデニム生地を染め抜いて作ったものだそう。旅籠、米屋等々店の名前が掛かっているが、その商売は随分前に辞めているところがほとんど。

この通りが最も栄えたのが江戸期、大森（石見）銀山から尾道までの銀・銅を運ぶルート上にあり、大森を出て3日目、ここで輸送隊が一休みして昼食を取る。この間、銀を背負ってきた馬を馬洗川で洗うとともに新しい馬への荷の付替え「銀付替」を行った。

この通りにはうだつ（自家と隣家の間の屋根を少し持ち上げた防火壁）が上がっている家が16軒ある。しかも建築当時のまま、いわば「手付かずの状態」で残っているのが珍しいという。しかし、壁が剥がれ落ちている家も散見される。「きさ商工支援センター」の松村紘二郎事務局長は「そこに住



案内図



む後継者もおらず、維持管理するのは難しくなるでしょうね」と。

吉舎が栄えたのは尾道・三原と出雲・石見を結ぶ雲石街道に立地し、しかも世羅台地と三次盆地の接点にあり交通、交易上重要な位置を占めていたためだった。後鳥羽上皇が隠岐へ島流しされた時、この地を通ったと言われる。

明治時代には双三郡屈指の商業地として栄え、毎月7日の付く日には市が立った。2月27日は雛市、“デコ市”とも呼ばれ、3月3日の雛節句を前に三次のデコ人形を買い求める人で賑わった。4月1日～7日の四月市は牛馬市を当て込んで町は活況を呈した。日露戦争頃までは三次よりも栄えていたと言われている。

しかし、大正4年（1915年）、広島⇄三次に芸備鉄道の開通で三次が広島との中継点として飛躍的に発展、その後昭和13年に三次⇄福山の福塩線が全線開通によって、吉舎は一通過点になり、ますます三次への商業集積が進んでいった。

戦後、昭和30年代から40年代にかけて国道184号線が銀の道の北東側に出来、吉舎旧市街地の商業地としての重要性はさらに低下衰退し、今日に至っている。

町ではきさ商工支援センターを中心に「よいとこ発見隊」をつくり、歴史と文化の薫る街『吉舎町』を売り出そうとしているが、現実には厳しい。

最後に広域合併の弊害について、かつての双三郡は平成の大合併で、吉舎、三良坂などすべて三次市に組み込まれた。吉舎町役場は現在三次市の支所。訪ねて銀の道のことを聞いたが、そこにいた職員が「さあ？」とパンフレットを探して「銀の道～三次エリア～」を渡すのみ。また商工会も広域商工会になっており、一人いた女子事務員が「私わかりません」、そこで紹介されたのが一般社団法人「きさ商工支援センター」の事務局長の松村さん、「支所にしても商工会にしても地元の人はいないんですよ。みんな転勤で来た人ばかり、吉舎の歴史などは知りませんよ」と。

（編集委員 三宅恭次）



田中写真館
（国登録文化財）
（筆者撮影）

第27号（平成29年1月15日）

○ こまちなみシリーズ ⑭

城下町・東城まちなみ(庄原市)

昨年10月中旬、庄原市東城町を目指してマイカーで自宅を出た。中国山地の紅葉はまだ少し早い。途中、三次盆地の雲海に驚いたが、ライトを点灯して無事に通過。10時過ぎには目的地、東城まちなか交流施設「えびす」へ到着。平成23年開館した市民交流・まちづくり活動拠点で、観光案内や地元工芸品などの販売もしている。（木曜定休日）

砂鉄と木炭が豊富で、東城は古くから「東城・西城くろがねどころ」と謳われた鉄の集散地。江戸期以降には東城浅野家の城下町として商工業が発展し、東城街道や有栖川（正式名：成羽川）を利用した水運で倉敷へ物資が運ばれた。街並みも整備され城下町の面影を残した宿場町としても栄えた。



案内図

●「三楽荘」（旧保澤家住宅）（平成 23 年 1 月、国登録有形文化財）

三楽荘は、明治期に東城の名匠と言われた横山林太郎棟梁により建てられ、東城のまちなみ景観の代表的な町家。建築当時、当主は呉服商・醸造業を生業としていた。昭和 24 年、旅館業へ転業し以後 60 年間旅館「三楽荘」として親しまれてきた。現在、庄原市が寄贈を受け歴史文化施設として活用している。旬の食材を使った郷土料理もあり、日本庭園に面した離れ座敷で味わうことが出来た。
（@1,500 円、要予約）



築 125 年の「三楽荘」本館

「三楽荘」の命名は「君子の三つの楽しみ」＜孟子＞説、「人が願い望む三つのもの」＜論語＞説などがあるが定説はないようだ。

●「東城まちなみ散歩ギャラリー」と伝統行事「お通り」

古い町並みを丸ごと美術館にするイベントが毎年、「帝釈峡」の紅葉シーズンに合わせて開催される。旧城下町の風情が残る町家が、期間限定のギャラリーに早変わり。藍染の刺し子のれんが下がる軒先をくぐると、和服姿の東城美人が笑顔で迎えてくれるそうだ。ギャラリーには各家のお宝や芸術作品が展示され、地域の特産品なども販売される。期間中の一（文化の日）は、大名行列・武者行列を再現し 400 年の伝統行事「お通り」が商店街を練り歩く。子ども達が背負う「母衣（ほろ）」は 300 年前の記録に残り全国でも珍しい。



「お通り」の「母衣」行列

●（株）ヤマモトロックマシン・東城工場（平成 28 年 2 月、国登録有形文化財）

昭和 7～13 年に建てられた、削岩機メーカーの木造施設群（工場と家族・独身寮）。工場は教会を連想させるレトロなデザインで、内部は栗材の柱が規則正しく並び神々しい空間。屋根裏の木造トラス構造も力強く美しい。



教会を連想させる木造の工場

大正末期に近隣でダム建設工事があった際、外国製削岩機の修理を引き受けたのが契機となり、独自の削岩機を開発。これがヒット商品となり会社は急成長を遂げる。その頃に建てられて現役で残る木造施設群は、県内有数の優れた産業遺産でもある。（原則非公開、年数回の見学日に再訪問した）

●「東城まちなみ保存振興会」の活動

東城町は平成の大合併で単独町制か合併かでもめたあげく、平成 17 年 3 月庄原市に移行した。合併により拍車のかかる「街なかの空洞化」を食い止めようと、商店街の店主が中心となり、合併して直ぐに保存振興会を立ち上げた。「ひな祭り」や「まちなみ散歩ギャラリー」開催、「三楽荘」の活用など地域活性化に大きな成果を上げてきた。平成 20 年度中国地域づくり事業報告会では「大賞」を受賞している。

丁度 10 年経過して振興会組織の高齢化が進み、若手後継者の育成・参加が大きな課題となっており厳しい現実もある。
（編集委員 高東博視）